

平成 23 年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
森林生態系・ニホンジカ保護管理合同部会
議事概要

◆日 時 平成 23 年 10 月 18 日 (火) 13:30 ~ 16:30

◆場 所 檜原市商工経済会館 7 階会議室

◆出席者

<委 員>

柴田 敏式	名古屋大学名誉教授
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
田村 義彦	大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長
野間 直彦	滋賀県立大学 講師
日比 伸子	西日本自然史系博物館ネットワーク 事務局
前田 喜四雄	元奈良教育大学 教授
松井 淳	奈良教育大学 教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学 准教授

(以上敬称略)

<関係機関>

林野庁近畿中国森林管理局計画部計画課	倉石 博 森林施業調整官
林野庁近畿中国森林管理局箕面森林環境保全ふれあいセンター	清水 好美 所長
奈良県農林部森林整備課	成瀬 達哉 主査
奈良県くらし創造部景観・環境局自然環境課	山中 崇史 課長補佐
三重県環境森林部自然環境室	力久 秀夫 主幹

<事務局>

近畿地方環境事務所	河原 武 統括自然保護企画官
	藤井 好太郎 国立公園・保全整備課長
	上村 邦雄 野生生物課長
	小林 達哉 国立公園・保全整備課長補佐
	三宅 里奈 自然保護官
	岸田 春香 係員
吉野自然保护管事務所	七目木 修一 自然保護官

(株) 環境総合テクノス	樋口 高志 環境部マネジャー
	保延 香代 環境部リーダー

(財) 自然環境研究センター 永津 雅人 研究主幹
岸本 年郎 上席研究員
荒木 良太 第一研究部 部長代理

◆議 事

- (1) 平成 23 年度森林生態系保全再生実施報告について
- (2) 平成 23 年度ニホンジカ保護管理実施報告について

◆議事概要

1. 平成 23 年度森林生態系保全再生実施報告について

① 苗木植栽試験とモニタリングについて

- ・今回の資料は 8 月に実施した現地視察における観察結果のみであるため、次回の資料では植栽した苗木のモニタリング結果を入れておくこと（村上委員）。
- ・植栽後は 5 年程度はモニタリングを継続して様子を見ておく。枯死したものについても記録が重要である。枯死した個体の植栽場所に関する情報も記録しておく（高田委員）。
- ・今回の視察結果において出た意見を今後のモニタリング手法に反映させると良い。枯死していた個体については、出来るだけ枯死要因が推測できるようなデータを取っておくこと（村上委員）。

② 自生稚樹の保護手法の検討について

- ・自生稚樹が集中して生育している箇所を面的（防鹿柵により）に囲うことになっているが、今回の実施範囲のような急峻な場所で防鹿柵を設置することが可能なのか？（松井委員）
- ・今回調査を実施した正木峠南東斜面以外にも自生稚樹が生育している場所はある。他の場所でも自生稚樹の調査を実施して欲しい。自生稚樹を保護するというのは、非常に健全な保全再生手法であると思うので、できるだけ優先的にやっていただきたい（田村委員）。

→今後も可能な限り調査を続けていきたい（環境省）。

③ 平成 24 年度以降の防鹿柵設置箇所について

- ・西大台で新たに候補地点としてあげられた No.51～54 について、防鹿柵を設置する理由が不明である。このエリアは元々下層植生がほとんどなく、シカの密度も低い場所であると思う（田村委員）。

→No. 51～54 はギャップ地であり、防鹿柵を設置することにより、後継樹が回復することは過去の調査結果から実証されているため効果があると考えている。また、ニホンジカも相当数生息していることがわかっていることから実施を検討している（環境省）。

- ・今回示された資料だけでは田村委員のような意見が出ても当然といえる。No.51～54 の概要でも「実生が生育している」と書いてあるのに、下層植生がないため、防鹿柵を設置するというのはどういうことか？（野間委員）

- ・この資料は一般的な説明資料としては説明不足である。特に西大台については長期的な防鹿柵の設置方針を含めてわかりやすい資料にする。例えば No.51～54 のような規模の小さいギャップ地は次世代の稚樹を育成することが目的であり、そのほか天然ヒノキ林の生育地などについてはその重要性も含めて防鹿柵の設置理由を誤解のないようにまとめておく（高田委員）。

- ・下層植生、実生などはニホンジカの被食により減少しているということを示しておく必要がある（村上委員）。
- ・水平タイプの防鹿柵というのはどういうものなの？（野間委員）
→南アルプスで実施している蛇カゴを並べたようなものを考えている。ただし、急傾斜地では降雪などにより破損するおそれがある（事務局）。
- ・今年は台風の被害が多く、従来の防鹿柵は破損が多く見られた。水平タイプの防鹿柵であれば、そのような被害も少なくなり、メンテナンスが容易になることも期待している（横田委員）。
- ・他地点での成功事例があるので大台ヶ原でもやってみようということである（村上委員）。
- ・水平タイプの防鹿柵の設置実験を以前大台ヶ原で実施したが、ミヤコザサの高さより低いものはシカが侵入したという結果も見られたことを参考までに言っておきます（横田委員）。
- ・東大台における防鹿柵の設置方針として下層がミヤコザサに覆われている箇所は設置しない、としているのであれば、既存の防鹿柵でそのような箇所に設置しているものについては撤去することも検討して欲しい（田村委員）。

④ 大規模ササ刈り試験区におけるモニタリングについて

- ・柵外試験区ではニホンジカの被食によりササの回復が抑制されているという結果も出ていることからもう少し継続する。土壤流出調査についても結果が出てから手法の妥当性も含めて検討を進める（村上委員）。
- ・参考としてニホンジカの個体数密度（平成22年度分）が示されているが、ニホンジカの密度については経年変化で示して欲しい（松井委員）。
- ・今後は、ニホンジカの密度とササの衰退状況について経年変化を示しながらまとめていくこと（村上委員）。

⑤ 水位計および雨量計の設置について

- ・9月の台風の影響はどうなっているのか？（日比委員）
→パイプ内に水位計を設置しているが、パイプが岸に打ち上げられて欠測している箇所もあったが、下流部については欠測がないのでデータがとれていると思う。雨量計については9/1～9/4の期間でヒバリ谷（東大台）で2,200mm、ナゴヤ谷（西大台）で1,800mmという結果がでている（事務局）。

⑥ 上北山村における小学生、中学生を対象としたイベントの実施について

- ・苗木生産を地元の小中学生が実施するのは非常に良いことだと思う。地域生産苗の元になる種子は多様性に配慮してできるだけいろいろな箇所から採取すること。また、採取地点を写真なども含めてトレーサビリティーができるようにしておくことが重要である（高田委員）。
- ・地域の多様な遺伝資源を残していくようにしっかりとやって欲しい（野間委員）。

⑦ 植生タイプ別調査：地表性甲虫類調査について

- ・前回までの調査結果と比較して見ていく必要がある。周辺の下層植生との関係については植被率を見ていきたいと考えている（日比委員）。
- ・トラップの設置数を示しておくこと（松井委員）。

⑧ 地域特性把握調査：昆虫類調査について

- ・ヒメボタルのように調査がしやすいものについては定点調査でもよいので、継続的に実施して欲

しい（村上委員）。

⑧ 地表性小型哺乳類調査について

- ・秋の調査結果が出ていないが、今までのところヒミズの捕獲数が減少している。食中類や地表歩行性の小動物は地表性昆虫類を食べるのでシカの影響を受けやすい。全国的にジネズミ、ヒミズなどが減っている（村上委員）。
- ・シャーマントラップは非常にデリケートなものなので、トガリネズミ、ジネズミなどが捕獲されないのはトラップのかけ方による可能性がある。同じ人がしっかりとやり方で設置しているのか（前田委員）。

→シャーマンの設置については問題ないと思う（事務局）。

⑨ 両生類・爬虫類調査について

- ・水量とオオダイガハラサンショウウオの相関についてはおもしろい結果がでたと思う。集水域面積との関係があるのではないか？（村上委員）

2. 平成23年度ニホンジカ保護管理実施報告について

① 大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画の改定について

- ・生息環境の回復指標という項目について、計画対象区域だけではなく、周囲も含めて考えて欲しい（野間委員）。
- ・計画対象区域外については、関係機関との連携で実施していく（村上委員）。
- ・回復指標については、ササの稈高以外に何かないのか？もう少し検討する必要がある（村上委員）。
- ・回復指標というのはシカの適正密度を考えるための指標でもある。今年被食を受けたか否かといった食痕調査が必要。5～7年に1回被食される程度であれば植生は維持できる（高田委員）。
- ・シカによる被害状況調査については林野庁が数年前から調査を実施している。その結果もそろそろ出てくるのではないか（柴田委員）。
- ・今後林野庁との協議を行っていく（村上委員）。
- ・今年はニホンジカの個体数密度調査としては、林野庁と連携するために、自然再生推進計画調査では糞粒調査に加えて糞塊調査を、林野庁の調査では糞塊調査に加えて糞粒調査を実施している（環境省）。
- ・シカの目標生息密度 10 頭/km² を達成できていないが、この目標頭数は変更しなくてもよいのか？（松井委員）
- ・昨年の区画法の結果では、西大台におけるシカの個体数が東大台の個体数よりも多いという結果が得られた。これほど大きな変化が見られるとは思ってもいなかった（柴田委員）。
- ・今年は東大台における糞粒数が例年よりも少なくなっているように思う。西大台は例年とほとんど変化がない（事務局）。
- ・今年は東大台におけるミヤコザサの稈高が高くなっていると感じた。一方川上村では例年なく下層植生が減少している。周辺地域との連携も含めて周辺調査の必要性を感じる（横田委員）。
- ・地形とシカの滞留時間との関係を把握する必要がある（高田委員）。
- ・シカの個体数密度は季節変動がある。6月の植生に最も影響を与える時期をどう扱うか（個体数密度調査は例年10月に実施している）、シカの滞留時間が植生にどれくらい影響を与えるのかな

どについて検討する必要がある（村上委員）。

② 平成 23 年度大台ヶ原ニホンジカ個体数調整の実施状況

- ・装薬銃による個体数調整（巻き狩り）は今後繰り返し実施していけば成果が上がってくるだろう（村上委員）。

③ 大台ヶ原ニホンジカ個体数調整のための新規手法開発について

- ・グラニュー糖を使ったハイキューブなどにクマが誘引されないようにする必要がある（村上委員）。
- ・クマの誘引効果の確認実験は危険ではないか？（田村委員）

④ 大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画の改定スケジュール

- ・パブリックコメントまでに1～2回小ワーキングが必要である（村上委員）。
- ・最終決定が3月の評価委員会であるとすれば、森林生態系の委員が植生にかかる議論をする場はどこになるのか？今回しか意見を言う場はないのか？（横田委員）

→12月の森林生態系ワーキングと1月の森林生態系部会を予定している（環境省）。

- ・森林生態系とニホンジカ保護管理の合同ワーキングが必要ではないか？（村上委員）

→検討します（環境省）

- ・利用対策部会のメンバーはニホンジカ保護管理計画の策定にあたってはどのような立場になるのか？意見を出す場を設けていただきたい（田村委員）。
- ・ニホンジカ保護管理部会としての意見がまとまった段階で、パブコメ実施前に各部会の委員に送付して意見を求める（村上委員）。

3. その他

- ・気象、雨量、水位調査については、水文学の調査としては不十分だと思う。もう少し踏み込んだ調査を実施して欲しい（松井委員）。

以上